

キャンパス名	千葉キャンパス				
授業番号	10589002				
授業名	環境保護と野外活動	形態	講義	単位	2
担当教員	岩田 優子				
開講学期	2025年度 後学期	曜日・時限	月曜3限		
授業目的	環境をグローバルな視点で捉え、身近な地域で行動できる人材育成を図る。環境を考えるに当たっては自然科学的な知識をもって自然を見つめ、活動に当たっては環境教育の手法を取り入れて行う。また、常に身近な環境に興味関心を持ち、人間の持っている感性を豊かに育てつつ持続可能な開発を目指す環境教育活動を積極的に実践する。				
授業内容	環境を学ぶに当たっては、先ず私たちが居住する地球環境を学ぶ。そこは大気圏・水圏・陸圏が存在し、80億を超える人間が経済活動を通して日々自然環境と関わりながら生活を送っている。「自然と人間との関わり」をテーマにして、人間にとって快適な環境とはどうあるべきかについて主体的・対話的で、深い学びを目指す。特に自然保護の視点に立ち、「緑」環境について実践的で活動的な授業を展開し、野外活動に応用できる技能を身に付ける。				
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ○地球のメカニズムを正しく理解し、人間の経済活動によってさまざまな環境問題が生じている現状を理解する。 ○地球環境の豊かな恵みを上手に利用しつつ、再生可能な循環型の環境を構築する方法を身に付ける。 ○野外活動に必要な基本的な知識と技能を身に付ける。 ○「Think Globally, Act Locally」を掲げて、学習した内容を身近な地域で還元できる能力を身に付ける。 ○防災・減災の知恵を歴史から学び、災害に対して適切な行動がとれる能力を身に付ける。 				
ディプロマポリシーとの関連性	<大DP1- (5)> 人間、社会、国際、自然等に関する広い知識と理解を有している。				
授業形態	基本的には講義形式の授業を行うが、アクティブラーニングの手法も活用して学生から質問や意見を求めたり、学生によるプレゼンテーションの機会などを設ける。				
事前・事後学習の所要時間	本科目では、各授業回に2時間の事前学習、2時間の事後学習を必要とする。 合計15回の授業で、事前事後学習60時間となる。				
テキスト	ISBN : 978-4-621-30302-3, 「小さな地球の大きな世界—プラネタリー・バウンダリーと持続可能な開発」, J. ロックストローム, 丸善出版, 2018年7月10日 ISBN : 978-4-7795-1459-3, 「ESDの地域創成力と自然学校—持続可能な地域をつくる人を育てる」, 阿部治・増田直弘(編), ナカニシヤ出版, 2020年3月20日 ISBN : 978-4-270-00226-1, 「不都合な真実 ECO入門編—地球温暖化の危機」, アル・ゴア, ランダムハウス講談社, 2007年6月27日 ISBN : 978-4-02-263070-4, 「子どもを育む環境 蝕む環境」, 仙田満, 朝日新聞出版, 2018年4月25日 ISBN : 978-4-00-271015-0, 「実践で学ぶ<生物多様性>」, 鷲谷いづみ, 岩波書店(岩波ブックレット1015), 2020年1月8日				
評価方法	本講義の到達目標に達しているかどうかをはかるために2回の授業内試験と野外活動の課題(環境教育プログラム作成)から総合的に評価する。				
評価基準	授業内容に関する授業内中間試験30点と授業内期末試験60点、野外活動課題10点で合計100点。事前学習のグループディスカッション・発表などにおいて授業貢献度が高い学生には、適宜ボーナス点を加味する。				
試験・レポート等のフィードバック	各授業回での課題レポートについては、次の授業回でフィードバック(事後学習)やグループディスカッション・発表(事前学習)を行う。 中間試験は第8回、期末試験は第14回に実施し、その結果は次の授業回で解説と評価を行う。公認欠席者には第16回に追試験を行う。				
注意事項及び履修条件	事前・事後学習を欠かさないこと。 授業内試験実施時(第8・14回)はパソコンを持参すること。				
S : 100~90、A : 89~80、B : 79~70、C : 69~60、D : 60未満					
第1回					
事前学習	シラバスを読み、授業目的、授業内容、到達目標、事前・事後学習の所要時間、評価方法、評価基準などを確認しておくこと。 地球上で発生している環境問題について調べてA4用紙1枚(40字×30行)に整理する。また、人類が地球に大きな影響を与えた時代を「人新世」と呼ぶが、この「人新世」とはどういう意味なのか調べておくこと。				

授業内容	「ガイダンス（地球環境問題とは）」 事前学習で調べた地球環境問題について発表し、その原因や問題点について意見交換、討論、質疑応答を通して環境の重要性を理解する。地球教室「2024基礎編・応用研究編」を参考に、地球環境問題の原因や解決策について自分自身の考えを整理するとともに21世紀を担う若者の言動が将来の地球環境を守る鍵を握っていることを確認する。また、地球環境問題の相互関連性やサステナビリティの概念、持続可能な開発目標（SDGs）誕生の背景や意義などを理解する。
事後学習	現在地球上で発生している環境問題について理解し、その解決策について何が必要かを考え、自分自身ができることは何かを整理する。 参考文献の地球教室「2024基礎編・応用研究編」朝日新聞環境教育プロジェクトを見て、「持続可能な開発」とはということかも整理する。 (A4用紙1枚(40字×30行))
参考文献	地球教室「2024基礎編・応用研究編」朝日新聞環境教育プロジェクト

第2回

事前学習	環境学習を進める中で地球環境問題が待ったなしの状況であることを実際に学び、学んだ多くのことをどのように身近な地域で実践していくかを考える。地球環境問題は学んだだけでは意味がない。行動に移して、少しでも地球にやさしい行動がとれる人間「think globally, act locally」でなければならない。野外活動を通して、自然の神秘さや大切さを次の世代に伝えるために何が出来るかをA4用紙1枚(40字×30行)に整理する。
授業内容	「野外活動としての自然観察会」 野外活動の実践として、身近な地域の自然観察会を紹介する。それは身近な自然を観察することで、「自然に親しみ、自然を理解し、自然を大切に守っていこう」とする心を育てるための活動である。地球環境を守るためには、まずは身の回りにある身近な自然を見つめることが大切である。つまり、外なる自然環境を守るには、内なる心を育てなければならないということである。自然観察会では何を、誰に、どのように伝えていくのかを学ぶ。
事後学習	第14回目に野外活動実践プログラムの作成を行うため、野外活動に関してどのようなことが出来るかを整理する。(例)自然観察会「四季の生きもの」、工作、ナイトハイク、星座観察会、身近な科学実験 (A4用紙1枚(40字×30行))
参考文献	「子どもと木であそぶ」 岩谷美苗 東京書籍 「森のたからもの探検帳」 飯田猛 世界文化社 「田んぼの楽校」 湊秋作 山と溪谷社

第3回

事前学習	2020年2月、中国武漢から全世界に感染拡大したといわれる「コロナウイルス」の影響により人類存続の危機に陥った。物や人々の交流は途絶え、世界経済は混乱状態にさせた。コロナウイルス発生の原因について調べ、自分自身が体験したことをA4用紙1枚(40字×30行)に整理する。 また、2019年の国連の温暖化対策に関するグレタ トゥーンベリさんの活動についてA4用紙1枚(40字×30行)に整理する。
授業内容	「持続可能な開発と環境破壊」 事前学習で調べたコロナウイルスの発生原因について発表し、その問題点について意見交換、討論、質疑応答を通して環境の重要性を理解する。 地球環境をまず自然科学から考えてみると、地球には、①大気圏 ②陸圏 ③水圏が存在し、そのメカニズムに触れ、偶然の重なり合いによって生命が存在している意味を重視する。と同時に、繊細で壊れやすい環境でもあることを理解する。この地球に生態系の頂点に君臨する人間の飽くなき経済活動によって環境が激変している状況を学び、この対応策を考える。具体的な五大環境問題として、①地球温暖化と②海洋汚染について学ぶ。特に第10回講義との関連で、持続可能な海洋資源について考え、地球温暖化による海水温の上昇やプラスチックゴミによる海洋汚染が海洋生物の死滅問題に繋がることについて理解を深める。
事後学習	地球誕生46億年の中で人類発祥はほんの一瞬にすぎない。この間人類は高度な文明を築いたものの、その結果として、現在さまざまな環境問題に直面している。地球温暖化による熱波、巨大台風の発生、森林火災、プラスチックゴミによる海洋汚染、森林伐採、コロナウイルス感染拡大など深刻な環境破壊の現状および環境保護に関して何が出来るかを整理する。(A4用紙1枚(40字×30行))
参考文献	テキスト(小さな地球の大きな世界、ESDの地域創成力と自然学校、不都合な真実)

第4回

事前学習	人口問題を先進国と開発途上国に分けたとき、それぞれの地域や国で発生する諸問題についてA4用紙1枚(40字×30行)に整理する。 自然環境の変化は自然そのものの活動に加え、人類の経済活動によるところが大きい。環境教育の立場から「地球環境にやさしい活動」とはということを用いるかをレイチェル・カーソン著「センス・オブ・ワンダー」を読んでA4用紙1枚(40字×30行)に整理する。
授業内容	「先進国と途上国の人口問題」 事前学習で調べた人口問題について発表し、その問題点について意見交換、討論、質疑応答を通して

	<p>世界の実状を理解する。地球の人口は現在80億人を超え、世界各地で食糧・エネルギー問題から人種・民族・宗教問題にいたるまで複雑に入り組んで政情不安な地域や国があることを学ぶ。人類は高度な文明を築き上げ、産業を発達させ、物質的に豊かで安定した生活を営むことができたようになった。しかしその結果、繊細で、豊かな自然環境が大きく改変、破壊されるようになった。自然が破壊されることで、人間の感性や人間性をも失うことに繋がる懸念が生じている。そのため地球温暖化をはじめとして、さまざまな環境問題を正しく理解し、環境にやさしい生き方を創造することを学ぶ。五大環境問題として、③水質汚染と④大気汚染についても学ぶ。</p> <p>また、幼児期における自然体験の重要性を確認し、生命あふれる、欠けがえのない美しい地球環境は「先祖からの贈り物ではなく、子孫からの預かりもの」として捉えることが重要であることを理解する。</p>
事後学習	<p>最大の環境破壊は貧困地帯や多民族間で発生する内戦や紛争である。その原因と考えられるのが、人口増加による食糧問題、民族・宗教問題などである。さまざまな環境問題を正しく理解し、環境にやさしい生き方を創造することを学ぶ必要がある。特に、幼児期における自然体験が豊かな感性を育て、自然に優しく接することができることを確認するため、幼児期に自然体験した事柄を整理する。 (A4用紙1枚(40字×30行))</p>
参考文献	<p>「センス・オブ・ワンダー」レイチェル・カーソン 佑学社 「なぜ地球の生きものを守るのか」(日本生態学会)文一総合出版 テキスト(こどもを育む環境 蝕む環境)</p>

第5回	
事前学習	<p>持続可能な開発目標「SDGs」とは何か、特に17の目標と169のターゲットについてA4用紙1枚(40字×30行)に整理する。また、2019年国連環境会議での若者の言動について資料を収集しておく。日本の国際貢献として青年海外協力隊「JICA」の活動状況をA4用紙1枚(40字×30行)に整理する。野外活動の一つとして「ダイヤモンド富士」とは何かを調べ、淑徳大学千葉キャンパスではいつ観測できるのか考えてみる。</p>
授業内容	<p>「SDGsと青年海外協力隊」 事前学習で調べた「SDGs」について発表し、その17の項目について意見交換、討論、質疑応答を通して世界の実状を理解する。「私たちが目指す世界『SDGs』、そして私たちが未来をつくる」をテーマに持続可能な開発目標について学ぶ。2001年から2015年までのミレニアム開発目標「MDGs」に触れ、目標と成果について理解した上で、2016年から2030年までに「17のグローバル目標と169のターゲット」について一つひとつ理解を深めていく。 JICAボランティア事業の目的を学び、青年海外協力隊の活動内容を知る。～「いつか世界を変える力」になる～ 将来の地球環境を守るために、若者が今しなければならぬこととは何かについて質疑応答を通して理解を深める。</p>
事後学習	<p>地球環境が年々変化していることを肌で感じ、危機感をもつようになった若者が多くなったことは良いことだが、ティッピングポイントを越えてしまったという科学者もいる。まさに「待たなしの地球環境問題」に対して今後どのような行動がとれるかが重要な鍵となる。 1) 「SDGs」の17の目標とアクションガイドを参考にして、どの目標だったら実行できるかを整理する。 2) 青年海外協力隊の一員になった場合どのようなボランティア活動に参加できるかを整理する。 (A4用紙1枚(40字×30行))</p>
参考文献	<p>「知る・わかる・伝えるSDGs 1-4」(日本環境教育学会監修)学文社 テキスト(実践で学ぶ生物多様性)</p>

第6回	
事前学習	<p>自然保護活動の原点といわれる「尾瀬の自然」について、その自然環境や自然保護運動の中心となった団体である「日本自然保護協会」の運動の目的などについてA4用紙1枚(40字×30行)に整理する。また、日本自然保護協会の設立から今日までの活動内容を調べてみよう。</p>
授業内容	<p>「自然保護活動とESD」 事前学習で調べた「尾瀬の自然」について発表し、その自然を守るためにどのような経緯があったのかについて意見交換、討論、質疑応答を通して環境を保護する意味を考える。自然保護運動のもっとも顕著な運動は「尾瀬の自然をまもる」運動であった。日本を代表する貴重な動植物が分布する日光・尾瀬国立公園に観光道路の建築が始まろうとしていたことに、多くの自然保護団体や有識者、住民が反対し、道路建設を回避した運動である。日本自然保護協会の自然保護活動の実際を学び、自然観察指導員講習会を紹介する。 また、関連する五大環境問題として、⑤森林破壊について学ぶ。 さらに、環境教育の目指す持続可能な開発のための教育「ESD(Education for Sustainable Development)」とは何であるのかを理解する。</p>
事後学習	<p>ESDと、そのルーツである開発教育と環境教育の三者の違いについて調べて整理してみよう。 (A4用紙1枚(40字×30行))</p>
参考文献	<p>尾瀬に死す(平野長靖)新潮社 霧の子孫たち(新田次郎)新潮社</p>

第7回	
事前学習	世界遺産とは何かを調べ、日本の文化遺産と自然遺産はいくつ指定されているか、指定された年代順にその内容をA4用紙1枚（40字×30行）に整理する。また、ユネスコのエコパークは現在10カ所を数える。ユネスコエコパークとは何であるのか、さらに銚子ジオパークについても同様に調べてみよう。
授業内容	「世界遺産（文化遺産・自然遺産）」 事前学習で調べた「世界遺産・日本遺産」について発表し、その遺産を守るためにどのような経緯があったのかについて意見交換、討論、質疑応答を通して遺産を保護する意味を考える。世界遺産についてその成立と文化遺産と自然遺産の相違点を書籍「世界遺産を問い直す」から考える。また、ユネスコエコパークとは、人が自然を守りながら自然について学び、自然と共に生きていく世界的なモデル地域のことをいう。2024年7月時点の登録件数は136カ国759件、日本では2019年6月現在甲武信（こぶし）ユネスコエコパーク登録を含め10の地域が登録されている。授業では2017年6月に登録されたみなかみエコパークについて、その目的、なぜ登録するのか、世界自然遺産との違いは何か、エコパークの問題点とは何かなどを学ぶ。また、ジオパークについては銚子ジオパークを例にして、自然景観の保護・保全、観光振興・地域振興、教育活動について解説をする。特に「開発と保全」について考え、その問題点について質疑応答を通して理解を深める。
事後学習	みなかみと銚子以外に指定されたユネスコエコパークとジオパークについて、それぞれ一つずつ調べてみよう。 小中高時代の自然教育活動（林間学校・修学旅行など）について、いつ、どこで、どのような体験をし、その体験が現在、自分自身の生き方にどのように反映されているか整理してみよう。（A4用紙1枚（40字×30行））
参考文献	世界遺産を問い直す（吉田正人）ヤマケイ新書 2018

第8回	
事前学習	緑地を保全する政策として、「ナショナル・トラスト運動」とは何であるのかをA4用紙1枚（40字×30行）に整理する。 宮崎駿監督の映画「となりのトトロ」の作品から、「里山の風景」、「日本の原風景」とはどのようなものかを考え、舞台となった埼玉県所沢市の「トトロふるさと財団」についても調べてみる。
授業内容	「ナショナル・トラスト運動」 事前学習で調べた「ナショナル・トラスト運動」について発表し、その制度の設置までの経緯などについて意見交換、討論、質疑応答を通して自然や文化財を保護する意味を考える。ナショナルトラストは、イギリスで始まった自然保護運動の一つで、多くの人々から少しずつ寄付を募り、その寄付を資金に自然や文化財を守るために土地を買い取っていく手法で自然保護を実践している。イギリス発祥のナショナル・トラスト運動の歴史と現状、そして問題点を学ぶ。また、日本ナショナル・トラスト運動の経緯と現状を埼玉県所沢市にある「トトロの森」を例にして、何のために緑地を保全するのかを紹介する。同時に、日本の原風景の一つとして雑木林の保存の重要性を理解する。また、東京都世田谷区で展開されている「世田谷トラストまちづくり-市民緑地制度」について映像を通して解説する。里山の保全とはどういうことか、質疑応答を通して理解を深める。 授業内中間試験の実施：第1回から7回までの授業内容理解度チェック「時間30分 30点満点」（パソコンを持参のこと）
事後学習	ナショナル・トラスト運動によって、身近に存在する貴重な自然や文化財などが大切に保存されていることと、里山の自然の特徴として①鎮守の森②雑木林③畑④小川と田んぼ⑤屋敷林などが一つのセットとなって存在し、これが日本の原風景であることを復習する。「里山の自然と人々の暮らし」というテーマで学習内容を整理する。（A4用紙1枚（40字×30行））
参考文献	ナショナルトラスト（木原敬吉）三省堂

第9回	
事前学習	野外活動の点からみた日本のユースホステルの現状をA4用紙1枚（40字×30行）に整理する。 日本のユースホステル運動は、海外の影響を受けつつ展開されてきた。その変遷や、一般財団法人日本ユースホステル協会の活動についても調べてみる。
授業内容	「ユース・ホステルと野外活動」 1909年ドイツのリヒアルト・シノレマンがワンダーフォーゲル運動に影響を受けてはじめたユースホステル（YH）運動は、日本における野外活動や自然体験の展開の歴史と大きく重なっている。日本においては、1950年に米国のYH協会から60名の会員が来日したことをきっかけに、全日本ワンダーフォーゲル連盟がYH運動の基盤を築いた。最盛期には会員数で1972年に63万人、施設数で1974年に587施設を数えたJYHだが、現在は全国で約130施設を数えるまでに減少した。この背景には他の安価な宿泊施設の台頭やインターネットの普及、少子化などの様々な要因があるとされている。 しかし、徒歩旅行に端を発するYHでは、カヌーやカヤック、シュノーケリングやダイビング、ネイチャーナイトウォッチングなど、豊かな自然環境を活かした野外活動が現在も多様に展開されている。日本のYH運動の歴史の変遷と野外活動における意義を学び、実際に現在のJYHがどのような自然体験を実施して生き残りをかけているのかを理解する。

事後学習	日本のユースホステルの中から1つ選び、そこで行われている野外活動が地域の自然環境をどのように生かしているかを整理する。(A4用紙1枚(40字×30行))
参考文献	日本のユース・ホステル運動の変遷(中村樗)愛知工業大学紀要6号、pp.39-50 日本ユースホステル運動30年史 日本ユース・ホステル協会 1981年

第10回	
事前学習	21世紀は「水の時代」といわれている。地球に生きる人類80億人の食糧は農業、漁業、林業からの生産によって支えられている。地球上に存在する水の割合を海水と陸水とに分けた時、人類にとって必要な水はどこから得ているのか、また江戸時代の玉川上水の歴史についてA4用紙1枚(40字×30行)に整理する。
授業内容	「地球上の水資源と歴史」 事前学習で調べた「地球上の水資源」や「玉川上水の歴史」について発表し、その特徴や飲料水について意見交換、討論、質疑応答を通して生命の源である水の確保の重要性を考える。水惑星である地球には海水が97.3%を占め、残り2.7%が陸水として存在している。陸水としてもっとも多く分布するのが氷河・残雪地帯であるため、その利用度はほとんどない。続いて地下水が存在し、河川水は水全体の0.01%に過ぎないことを学ぶ。それだけに水資源は貴重であり、急激な人口増加に対して新鮮な水の確保は死活問題となる。その貴重な水資源を日本では谷津田から湧き出る湧水によって稲を作り、生活を支え、命を繋いできたことを学ぶ。谷津田は生物多様性を呈し、里山の景観が日本の原風景であることを理解する。 事例研究として、1. 江戸時代に完成した玉川上水と武蔵野の新田開発について 2. 野川と国分寺崖線について 3. 谷津田自然観察会「大草谷津田いきものの里(千葉市)」を紹介する。 さらに、千葉県の水「上総掘り」や「川廻し地形」「二五穴」に関して、その特徴や構造について学び、生命の源である水の確保の重要性を考える。
事後学習	千葉市若葉区にある「大草谷津田いきものの里」を訪ねて、「湧水と生物多様性」を含む自然環境について調べる。(A4用紙1枚(40字×30行))
参考文献	めぐろシティカレッジ叢書8「川からひろがる世界」(菊池俊夫編著)二宮書店 別冊太陽「里山の四季」平凡社 わきだせ!いのちの水:日本伝統の上総掘り井戸をアフリカに(たけたにちほみ)フレーベル館

第11回	
事前学習	兵庫県豊岡市と新潟県佐渡市で行われてきた絶滅危惧種の野生復帰事業について調べ、A4用紙1枚(40字×30行)に整理する。
授業内容	「自然共生社会とエコツーリズム、インタープリテーション」 事前学習の発表や質疑応答に基づき、自然共生社会アプローチによる持続可能な地域社会づくりを展開してきた兵庫県豊岡市と新潟県佐渡市の2つの事例研究を行う。カーボンニュートラル(低炭素社会)やサーキュラーエコノミー(循環型社会)に続く世界の潮流になりつつあるネイチャーポジティブ(自然再興)の概念は、持続可能な地域社会づくりの3本柱となる自然共生社会の実現に向けて大きな鍵を握っている。事例研究を通じ、特に少子高齢化に伴う人口減少という喫緊の課題に直面する日本の地方都市におけるネイチャーポジティブの意味を考える。 豊岡市では、持続可能な地域社会づくりの一環として、野生復帰事業に留まらない「コウノトリツーリズム」というエコツーリズムを派生させてインバウンド需要を取り込んできた。エコツーリズムとは、環境省により「地域ぐるみで自然環境や歴史文化など、地域固有の魅力を観光客に伝えることにより、その価値や大切さが理解され、保全につながっていくことを目指していく仕組み」と定義されている。 エコツーリズムとの関連で、100年ほど前にアメリカの国立公園で始まった「伝える手法(技術)」としてのインタープリテーションとインタープリター(自然観察員)についても学び、自然共生への多様な関わり方について理解を深める。
事後学習	小林(2013)「日本の自然公園におけるインタープリテーション活動への取り組みに関する研究」を読んでインタープリテーションとエコツーリズムの関係をはじめとする内容を理解し、概要を整理する。(A4用紙1枚(40字×30行))
参考文献	テキスト(実践で学ぶ生物多様性) 日本の自然公園におけるインタープリテーション活動への取り組みに関する研究(小林生花)筑波大学学位論文梗概集2013

第12回	
事前学習	2020年1月17日、市原市田淵の養老川沿いの露頭が地質年代の境界を示す国際模式地「チバニアン」として国際地質科学連合より命名された。この「チバニアン」について調べ、A4用紙1枚(40字×30行)に整理する。 また、2017年10月13日千葉市若葉区にある加曽利貝塚が国の特別史跡に指定された。特別史跡の意味と加曽利貝塚の特徴についても調べておく。
授業内容	「歴史的環境の保全」 身近な歴史的環境の保全について考えてみる。事前学習で調べた千葉市市原市の「チバニアン」や千

	<p>葉市の「加曽利貝塚」に関して、その特徴や構造について意見交換、討論、質疑応答を通して千葉の地質年代や縄文遺跡の歴史的意義を考える。歴史的文化財などの指定に関する条件や保護・保全・管理について、加曽利貝塚を例にして学ぶ。加曽利貝塚は、5,000年前から3,000年前（縄文時代中期から後期）に形成され、出土した土器が時期区分を決める基準になるなど考古学研究の発展に貢献した。昭和30年代には市民による保存運動が起こり、埋蔵文化財の保護と活用の先進事例であると評価された。「特別史跡」とはどのような意味なのかを考える。加曽利貝塚は62件目の指定であり、縄文時代の特別史跡は三内丸山遺跡などに次いで4例目となる。加曽利貝塚周辺の自然環境を地形図から考察する。</p> <p>また、千葉県地層から地質年代を概観し、新生代第四紀の更新世中期（77.4万年～12.9万年）にあたる国際的な時代名に「チバニアン」が候補として上げられていたことを学ぶ。この時期は地球磁場の逆転期であり、市原市田淵の養老川沿いの地層「白尾凝灰岩層」に見られる。2020年1月17日に正式に「チバニアン」として命名され、これまでの経過とその意義について学ぶ。また、千葉県地質構造について基本的な堆積状況やプレートテクトニクスによる地震の発生、防災について考える。</p>
事後学習	<p>全国の貝塚数は千葉県が744/3,955遺跡と一番多い。加曽利貝塚が国宝級の遺跡であることの意味と縄文人の生活環境を整理する。また、千葉県内の地質構造を調べ、砂泥互層や帯水層、鍵層などについてまとめる。（A4用紙1枚（40字×30行））</p>
参考文献	<p>千葉の自然をたずねて（近藤精造）築地書館 千葉県の地震・活断層・津波（我妻崇ほか）地質ニュース606号，25-30頁，2005年2月</p>

第13回	
事前学習	<p>地域調査の基本は地形図を読むことにある。そのために縮尺や方位、等高線、地図記号などを復習しておくこと。</p> <p>また、自分の関心のある地域の自然環境に関する課題を調べ、どのような調査方法によって問題点をより深く理解し掘り下げられるか、A4用紙1枚（40字×30行）に整理する。</p>
授業内容	<p>「社会調査手法としてのフィールドワーク」</p> <p>自然環境に係る問題にアプローチする方法として、社会調査の2つの手法—質的調査法と量的調査法—のうち、質的調査を行うフィールドワーク（現地調査）に焦点を当てて実践を行う。</p> <p>質的調査法といってもさまざま、対個人のインタビュー（聞き取り）調査やフォーカス・グループ（座談会。グループ・インタビューやワークショップ）、参与観察などがある。インタビューの種類としては、構造化インタビュー（指示的面接法）、半構造化インタビュー、非構造化インタビュー（非指示的面接法、聞き取り調査）、そしてグループ・インタビューがある。また、地域調査の基本は地形図を読むことであり、地図記号の正確な理解が求められる。マッピング調査は、この上に成り立つ。地域リソース（資源）調査は、衰退化する地域で持続可能な地域社会づくりを検討するのに有効と考えられる。それぞれの調査に長所・短所があるので、目的に応じて調査手法を使い分けることが重要である。</p> <p>フィールドワークにおける各調査手法を学ぶと共に、開発途上国の環境問題を検討するときのワークショップの進め方についても紹介する。</p>
事後学習	<p>事前学習で選んだ地域と自然環境に関する課題について、授業で学んだ6つの調査手法のいずれか（2つまで可）を用いて調査を行ったと仮定し、どのように調査手法を用いたかを述べる。結果については、今回は文献調査でわかる範囲でまとめる。最後に課題解決に向けた自分なりの具体的なアイデアも示す。（A4用紙1枚（40字×30行））</p>
参考文献	<p>「身近な地域を調べる」竹内裕一・加賀美雅弘（編）古今書院</p>

第14回	
事前学習	<p>雑木林を使って子どもたちに遊びを通じた環境教育プログラムを考えてみる。クヌギ・コナラの雑木林で、どんな野外活動ができるか、2～3つのアクティビティを考える。季節や活動時間は問わない。雑木林にある自然物を利用した遊びを考え、安全で、楽しい思い出に残るプログラムをA4用紙1枚（40字×30行）に整理する。</p>
授業内容	<p>「環境教育プログラム」</p> <p>事前学習で作成した野外活動「環境教育プログラム」について発表し、その目的、遊びの内容、教育的効果などについて意見交換、討論、質疑応答を通して環境教育の重要性を考える。環境教育の実践例として、子どもたちと過ごす四季の雑木林プログラムを紹介する。春：①火起こし体験 ②食べられる植物 ③竹の道具作り 夏：①草木染に挑戦 ②昆虫採集 秋：①ドングリの味比べ ②木の実・落ち葉の絵画展 冬：①炭焼き体験 ②狩猟体験 自然観察を通して四季の雑木林の動植物のようすを五感を使い、体験を通して学ぶ。</p> <p>雑木林を代表する樹木は、クヌギ・コナラなどの落葉広葉樹林である。これらの樹木はドングリになる樹木で、子どもたちにとっても人気がある。秋には落ち葉が林床部を覆い、雑木林を歩く時は絨毯の上を歩いているような気分になる。色とりどりの落ち葉を集め、糊付けをして落ち葉の絵画展ができる。ドングリに小さな枝を刺して、コマを作って遊ぶこともできる。勇気を出して木登りにも挑戦する子や木の実を集めてきて「おままごと」をはじめの子など、子どもは自然の中では自由に活発に動き回る。自然体験は感性を豊かにし、生きる力を養うことに繋がることを学ぶ。そして、子どもの頃に体験した出来事がプログラムの基本になっていることを検証してみる。</p>

	授業内期末試験の実施：第1回から13回までの授業内容理解度チェック「時間60分 60点満点」（パソコンを持参のこと）
事後学習	環境教育プログラム「雑木林で遊ぼう」を修正、発展させてみる。地域を雑木林から広範囲に設定し、ある地域の自然・歴史観察の環境教育プログラムを作成し、プレゼンテーションできるようにUSBにまとめて準備しておく。
参考文献	「子どもと木であそぶ」 岩谷美苗 東京書籍

第15回

事前学習	第1回から第14回の授業を振り返り、学んだことを将来に活かすための具体的な行動計画を考えてみる。繊細で、微妙なバランスが保たれた地球に生きる私たち人類は、21世紀を平和で、安全で、持続可能な発展をしていくためにはどのような生き方が求められるのか、あなたの考えをA4用紙1枚（40字×30行）に整理しておくこと。
授業内容	<p>「まとめ：21世紀をどのように生きるか」</p> <p>事前学習で作成した「21世紀をどのように生きるか」について発表会を実施し、授業の総まとめとする。地球環境を学び、自然からの恵みを得て人類は文明を築き発展させてきた。しかし、自然を酷使した結果、大きく環境が改変され、破壊されるようになった。人間生活が豊かになればなるほど貴重な自然は失われ、再生不可能な状況に陥るようになった。環境問題の悪化は人類存亡の危機であり、現在を生きる我々の責任でもある。この美しい自然を私達だけの世代が享受し、破壊の限りを尽くしてしまっはいけない。これから生まれてくる子や孫に美しい状態で手渡さなければならない責任がある。地球誕生の歴史から考えてみると人類の発祥は1日の終わるわずか数秒前のできごとである。その数秒間で人類は高度な文明を築き上げ、同時に環境に負荷を与え、まるで自分で自分の首を絞めようとしている。自然が破壊されることは、人間が壊れていくことと同じことであることを理解する。</p> <p>災害大国に暮らす私たちは、自然災害に対して歴史から防災・減災の知恵を学ぶことが必要不可欠な状況になった。防災・減災の知恵を紹介し、予知できない突然の災害に対応できる能力を身に付けるにはキャンプ体験などで不便さを体験したり、被災生活の疑似体験をあらゆる機会に、あらゆる場所で実施することが重要となってくる。</p> <p>「野外活動（環境教育）プログラム」の発表会の実施と第14回で実施した授業内期末試験の解説を行う。</p>
事後学習	15回の授業を通して、「環境保護と野外活動」について十分理解できたかを振り返る。地域の自然環境や歴史環境を十分に理解したうえで、野外活動を通して地域性の解明ができたかを振り返る。学んだ知識を地域に還元できたかを自己評価する。（A4用紙1枚（40字×30行））
参考文献	こどもの目を おとなの目に重ねて（中村桂子） 青土社 せまりくる[天災]とどう向きあうか（鎌田浩毅） ミネルヴァ書房

※この他に試験が実施される場合があります。担当教員の指示に従ってください。

ディプロマポリシー	<p><大DP-1>【社会の構成員としての基本的知識・技能・能力】</p> <p><大DP1-（1）> 日本語や英語のコミュニケーション能力を修得している。</p> <p><大DP1-（2）> 情報リテラシーや数量的スキルを修得している。</p> <p><大DP1-（3）> 課題発見・問題解決能力を持ち、主体性をもって協力し合う態度を身に付けている。</p> <p><大DP1-（4）> 自己管理能力、倫理観、リーダーシップ、市民としての社会的責任、生涯学習力を修得している。</p> <p><大DP1-（5）> 人間、社会、国際、自然等に関する広い知識と理解を有している。</p> <p><大DP-2>【専門教育分野における知識・技能・能力】</p> <p><大DP2-（1）> 自らが学んだ学位プログラムの基礎となる原理・原則を理解し、それに基づく体系的専門知識を修得している。</p> <p><大DP2-（2）> 修得した体系的専門知識を、実践の場において活用する技能や態度を修得している。</p>
-----------	---